

一緒に考えてみませんか

生きるためのACP



◀講師の金城隆展先生

「どう生きるか」から考えるACP

▶▶5 拡大版

10月14日に、琉球大学地域・国際医療部の臨床倫理士である金城隆展先生のWEB講演会を行いました。同仁会をはじめ、全国より

医療・介護関係者、一般の方々など、200人を超える方々にご参加いただきました。

講演会テーマ

「よりよく豊かに生きるACP」

「意思決定支援から共同へ」

大きなテーマとして、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）がどういった時代背景の中で登場したのか？患者さんは、自分の受ける医療に関して十分な情報開示を受けているだろうか？患者さん自身の価値観、治療目標に沿って、自己決定をする権利は機能しているだろうか？そのことを金城先生は、常に提起されていました。

療目標に沿って、自己決定をする権利は機能しているだろうか？そのことを金城先生は、常に提起されていました。

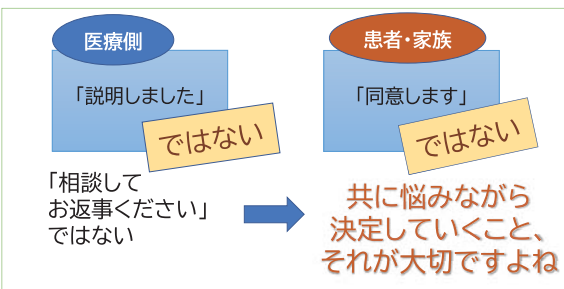
インフォームド「コンセント」の概念

医療者の判断が中心と

ACP（アドバンス・ケア・プランニング 人生会議）とは

話し合いを介した相互の理解のプロセスで、決して「何かを決めること」ではない。

患者と医療従事者がともによりよく豊かに生きるために、選択を意識し、「選べること(変えられること)」と「選べないこと(変えられないこと)」を見極め、当たり前におちいることなく、物語（ACP）をともに紡ぐ。



インフォームドコンセント

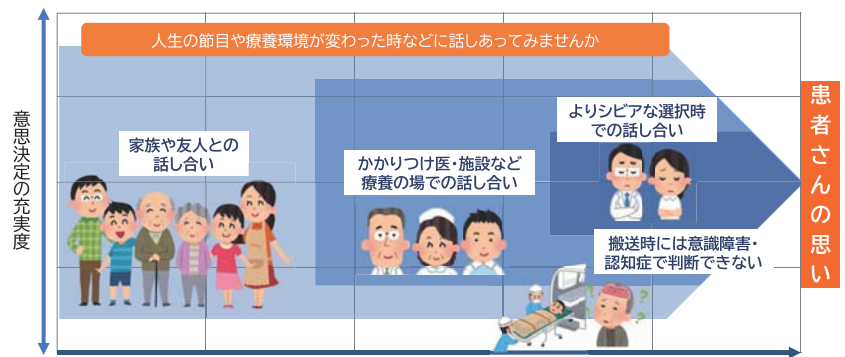
画一化や形式化が生まれ、医師の責任回避のための道具とし、医師と患者の信頼関係を破壊することになってはいませんか？」と、金城先生の問いかけが続きます。

して行われていた時代に、インフォームドコンセントが導入され、「説明と同意」と訳されましたが、医療界のなかからこの訳語を当てはめるのは適切ではないことが指摘されました。「インフォームドコンセントの実践は推進されるべきですが、これを法律の中に明文で規定することで、実際の運用のなかに、インフォームドコンセントの画一化や形式化が生まれ、医師の責任回避のための道具とし、医師と患者の信頼関係を破壊することになってはいませんか？」と、金城先生の問いかけが続きます。

本題のACP

「講演の中には、ACPを考えるにあたっての多彩な工夫がちりばめられており、「レ・ミゼラブル」や「春の約束」の映像とともに、倫理的な課題を当事者として考えられるヒントがありました。また、歴史的な「ACP・人生会議」が生まれてきた背景について端的に説明があり、改めて私たちが現在直面する問題と向き合うことになりました。

医療の発達や高齢化に伴い、ACPの議論の必要性が迫られてきています。「話し合いの結果が重要なのではなく、プロセスである」という感覚が、また「人生の最終段



ご本人がどうしたいかを理解し、医療者とも共有するにはある程度の時間が必要です

セスを大切にしながら、ご本人と繰り返して物語を紡いでいくことが、最も大事なことです。繰り返し語り返すことで、入院期間が短い中、また様々な状況の中でACPの議論が難しい場合があります。先送りするのはなく、医療者も十分に配慮しながら、個人がどのように最後まで生きていこうかを話し合う機会をつくり、共同意思決定（シェアード・デシジョン・メイキング）の進める必要性を、ともに考える時間になりました。

みなさんの感想から

「ACPはあらゆる年齢、どのステージにおいても、ご本人やご家族をサポートし、将来の医療に関する個人的な価値、人生の目標、その人にとって何を理解し共有するプロセスである」という感覚が、また「人生の最終段

これからの私たちの地域

私たちの取り巻く状況は、もう医療だけ、介護だけで答えを出すことはできません。そして一つの病院・施設だけではなく、地域として取り組んでいく『生きるためのACP』を、連携して作りだしていく必要があります。そのようななかで、金城先生より提起があった「どのような社会を遺していくのか」は、深く響いたフレーズでした。

ペンネーム
 T子&Tigra